

Review of “Humanistic Approach to Japanese Language Education”

『人間主義の日本語教育』

Title: Humanistic approach to Japanese language education: intellectual book series for Japanese language teachers 3

『日本語教師のための知識本シリーズ③ 人間主義の日本語教育』

Editors: Yozo Okazaki, Koichi Nishiguchi and Izumi Yamada

岡崎洋三・西口光一・山田泉 編著

Year of Publ.	2003
ISBN	4-89358-541-X
No. of Pages	313p
Place of Publ.	Tokyo, Japan
Publisher	Bonjinsha



Reviewed by Satomi Chiba

1 序文

21世紀の日本語教育はどのような方向に向かっていくべきなのか。日本語教師はどうあるべきなのか。

本書は新しい時代の理想的日本社会を多民族が平和に共生する多文化共生社会とし、その理想的日本語教育のありかたを「人間主義の日本語教育」として掲げる。「わたしたちが目指す日本語教育は、単に日本語の運用能力を高めるだけのものとは考えたくない。学習者や教師という役割を超えて、教育活動に参加するものが相互に相手の『学び』にかかわり、ともに人間的に成長していくことを目指すものになりたい」と本書は語る。つまり、言葉そのものの指導に偏重してきた従来の日本語教育を批判し、学習者の人間性を重視した日本語教育を目指そうというのである。ただし、本書はその方法を説く指導書ではない。現状の問題点につ

いて読者の気づきを促す啓発の書であり、ひいては日本語教育界に人間主義革命を起こそうと読者を扇動し導く手引き書である。斬新なのは、従来の語学教育的見地からみた日本語教育研究とは異なり、グローバルな視野で日本語教育を社会との文脈の中で捉え、日本語教育と社会との関係を築くために「行動」する新しい日本語教師像を提示している点である。

著者は、多文化・多言語共生社会における日本語教育の分野で日本を代表する山田泉氏、西口光一氏、岡崎洋三氏を始め、日本語教育の現場の関係者である。本書の中で、それぞれの著者が、それぞれの方法で人間主義に基づく理想的日本語教育を真摯に模索しつつその理想的あり方の指針を提示している。

2 本論

序章は「人間主義の日本語教育」とは何かについて語る。従来の教育は、経済至上主義という社会背景を反映し、数字で図れる能力の獲得を重視してきた。その弊害として学習者の多様な人間性が抑圧されていると本書は鋭く批判する。そして、教育にとって大切なのは知識や能力の獲得よりも「人格形成・自己変容・人間性の発達」であると主張する。「自己変容」とは、自己実現のために変化し続ける人の変化であり、人は「自己変容」によって人間的に成長し続けるのだという。従って、教育の真の目的は学習者の「自己変容」に関わっていくことであり、日本語教育の現場は「日本語という道具や手段」だけを教える場から、教室という場面における「人間くさい生き生きとした知的営みによる人間としての成長の場」となることを目指すべきであるという。いわば、技のみならず、精神成長を促す道場とでも呼べるであろうか。これは、新しい言語教育観であると同時に教育の真髄への回帰を促すものとして説得力があり、読者を啓発せずにはおかない。また、本書が「自己変革」という能動的な言葉をあえて避け、「自己変容」という言葉に固執するところに、他者あるいは異文化とのかかわりあいの中で変わっていく個人の人間的成長を促す日本語教育をめざそうとする本書のメッセージがよく現れている。

第一章は、「地域社会と日本語教育」(『ことばと文化を結ぶ日本語教育』(2002年))をはじめとする執筆活動のみならず、自ら社会変革のために行動する教師として積極的に人間主義の日本語教育を実践している山田氏の執筆である。山田氏は、社会的文脈の中で「人間主義の日本語教育」を考察する。日本社会が移民を受け入れるのであれば外国人に「同化」を求めるのではなく、社会制度を変えるべきだと山田氏は主張する。例えば、外国人に日本語を覚えさせようとするのではなく、社会を多言語化せよというのである。中国帰国者の日本語教師であ

った山田氏は、自らの経験からその必要性を感じずにはいられなかったのであろう。「多文化共生社会」実現のため「人間と人間社会のため『人が変わり、社会を変える』ことに貢献する」のがこれからの日本語教育の使命であり、教室と社会との接点に立つ日本語教師は、教育活動を通して社会問題に気づき、変革のために行動せよという。この山田氏のメッセージは、教室と社会を隔絶する壁が轟音とともに崩れ落ちようとしている新しい言語教育環境における逞しい教師像を読者に喚起する。

第二章は、著書『日本語とテンの打ち方』（1988年）で知られる岡崎氏のミクロの世界からの完全な脱皮を明らかにする。岡崎氏は、好奇心という人間の本能を「学び」の真髄として据え、日本語教育の中に新しい方法論を積極的に取り入れようと試みる。岡崎氏は教育の目的は「個性豊かな人間を作ること」であるという。「個性」とは、日本語の「うまさ」より、内容そのものを大切にするのだという。また、学習とは、「するなと言われてもしたいもの」を「学習者自身が主体的かつ個性的に好んで行うもの」であると述べる。つまり、熱中するほど好きなことを、その人の個性的なやり方でする中に「学び」があるという。その具体的方法論として、社会学のフィールドワーク、エスノメソドロジーなどを日本語教育に応用することを提案する。外に出ることだけでなく、教室活動全体を「机上の静的で競争的なもの」から「動的で全人格対話的で人間的なもの」に解放したいというフィールドワーク的日本語教育の発想は独創的である。

三章以下には、地域の日本語教室、小学校、高校、大学など日本語教育の現場で苦闘する教師による実践報告が続く。報告の中で、異文化理解の不足などからくる問題点が浮き彫りにされ、学習者同士体験を語り合うなどして異文化への理解を深める教育が必要であると提言がなされる。また、第八章の齋藤守臣氏の報告の中では、異文化理解に対する教師の意識変革も促される。「われわれの他の文化に対する価値判断の基準は無意識に日本文化を踏まえており、外国の文化を否定して日本文化の押し付けをしている。」例えば、中国の正月に所属しているチームの試合を休む中国人学生に対して、「試合のほうが大切だ」と日本文化的価値観で学習者の行動を判断・評価するのは「無意識の同化圧力」だと警鐘を鳴らす。日本語教師は、「二つの文化を持つ貴重な存在」という認識を持って学習者の行動の背後にある文化的側面を理解し、お互いに歩み寄るべきであるし、また、理解できないときは、価値判断を保留して、改めて判断をくださるべきだという。確かに、日本語教育の現場では、日本人にいかに受け入れられるかが重視されたり、いかに日本人のようであるかが評価の対象となっている現状があり、読者は自己反省へと導かれるであろう。齋藤氏の異文化理解に関する提言は、これからの日本社会を創造する日本国民全体にとって不可欠のものとなるであろう。

第九章「エンパワメントとしての日本語教育」が目指す日本語教育は、学習者が個人の力で、また他者との関わり合いの中で潜在能力を取り戻すことである。「学習者には日本ではこうすべきだという外的抑圧と自分には溶け込むことはできないという内的抑圧がある」という。更に、学習者個人の日本語学習や滞在の目的、個々の経験、感情が異なるにもかかわらず、教室内では一様に母語話者のように日本語が上手になることが目標とされていると著者は批判する。著者は、個性的な一人の人間である学習者をそれらの抑圧から解放し、彼らの潜在能力を信じようとしており、その潜在能力を引き出す営みを「エンパワメント」と呼んでいる。プロジェクトワークなどの実践を通じて、「学習者一人一人の体験を受けとめ、共感し、ゆすぶられる」ことが日本語教師の役割であるとするのは感動的である。

第十章で、教師によって選択されるのではなく、「学習者が学習内容を選べる日本語教育」の授業例が岡崎氏によって紹介される。岡崎氏は、「学生にとって緊張も充実も感じない授業は『予定調和的で、儀式的』である」と授業をコントロールしようとする教師を暗に否定する。予期できないからこそ、学習者の個性的な人間性に接する『時空間』が開かれるのだという。そして、「学習とは、教師によって与えられるものを学習者が『消化する』というものではなく、学習者自身が自分で『消化する』ものを選ぶようにすることである」と述べる。更に、学習者の意見や希望を聞き、教師と学習者両方で学習内容に関与していくことによって、「学習を動的・全人格的・共同作業的で『生きているもの』、授業を『いま、ここ』だけの生き生きとした緊張感のあるもの」にしたいという。

終章で西口氏は、まず、コミュニケーションにおけるコミュニケーション理論を批判的に概観する。そして、バフチンとオングの言語理論を踏まえ、「教室における活動について社会文化的な視点を持つ」という新しい言語とコミュニケーションに対する考え方と「人間的日本語教育」との接点を見出していく。人間主義の日本語教育における理論的枠組みを提示した西口氏の学術的貢献は大きい。

最終章の座談会で編者一堂に会し、春原憲一郎氏を交えて「人間主義的なもの」をめぐって活発な討議が展開される。ともすると教室の中でないがしろにされてきた学生の人間性を読者に再認識させると同時に、21世紀の社会の日本語教育における人間と人間、人間と社会、社会と日本語教育との関係作りの重要さの認識へと読者を導く。その実践者となる日本語教師の役割は、学習者同士の人間的交流の場を作ることだと西口氏は語る。また、「人間主義の日本語教育」の理想的学習形態は、従来の教師主体の知識伝授型授業にはない学生主体の授業である。春原氏のクラスでは、学習者自身が学習内容を選び、教室を出て社会で学び、教

室に戻ってくるような活動が行われている。そこでは、自立した学習者による学生主体の授業によって、学習者と社会と日本語教育が一線につながる「人間主義の日本語教育」の理想的実践がなされている。「人の可能性を無前提に信じ、言葉の教育を通して、人と人、人と社会との関係を作る」のだと氏は語る。このように、多くの生き生きとした実践例や経験が現場の教師によって語られているため、「多文化共生社会」における「人間主義的教育」がユートピア的理想郷で終わることなく、非常に現実味を帯びたものとして読者に迫ってくる。

3 結論

以上述べたように、「人間主義の日本語教育」には著者により様々な解釈があり、様々な提案がなされ方法論が提示される。しかしながら、人間主義的日本語教育の真髄は首尾一貫し、メッセージ性がよく出ているため、読者を無意識のうちに人間主義的日本語教育の一派へと導く力強さがある。日本語教師は、学習者と社会との境界に立つ役割の重要性を認識し、変容を促されることであろう。そして、教育とは何かという思索へと導かれるであろう。読者それぞれが人間主義的日本語教育を模索し、個々の現場で実践していきたいものである。そして、紛争のないよりよい平和的共生社会の創造に貢献できる学生を育てていきたいものである。日本語教育に携わるすべての関係者に読んで欲しい良書である。

Summary in English

A Humanistic Approach to Japanese Language Education is a revolutionary book in the field of teaching Japanese as a second language in the 21st century. It proposes a new direction based on humanistic approach as opposed to the traditional approaches which oppress individuality by putting too much emphasis on acquisition of knowledge. The new approach aims to provide a space where both teachers and learners participate in the process of learning and growing up through it. *Okazaki, Nishiguchi, Yamada* and other practitioners have suggested one's own interpretation of humanistic approach and the applications to Japanese language education such as content-based project work and field work.

The book is enlightening in the sense that it urges the teachers' self-reflection and necessity of self-development conforming to our ever-changing new era.